

## 編集後記

11月も半ば過ぎというのに、朝の気象ニュースからは「今日も10月上旬の気温になるでしょう」という言葉が幾度となく聞かれました。こういうとき、急に寒くなった際には、皆様、特に風邪には要注意です。

さて、今月号も好奇心が刺激される知的な投稿をいただきました。

一本目は、恒木健太郎氏の「他所者の無記名証券による隠匿—ヴェルナー・ゾンバルトのユダヤ人観の一断面(2)」で、277号に掲載された(1)の続編です。ゾンバルトの無記名証券の法形式とユダヤ人との関係をめぐる考察の中で、無記名証券の普及にユダヤ人の迫害が影響していたことが示唆されている点が指摘されており、最後の結の部分は興味深くミステリアスともいえる内容でした。

二本目は、中村友保氏とその海外共同研究者であるオレゴン大学の Michael Dreiling 氏、Nicholas Lougee 氏による「福島原発事故に日本の環境団体はどう対応したか」です。日本の環境団体が2011年3月11日の東日本大震災に対して、その後どのように行動したのかを、特に多くの団体が原発災害に対して沈黙したままであったことに焦点を当て、団体のアイデンティティ、資源、そして政治的・組織的に埋め込まれたネットワークの違いからその要因を明らかにしています。市民運動の組織やそのあり方について考えさせられるものでした。

三本目は、松田智穂子氏の「『凱旋のジャマイカ』(1937年)—モダン・パジェントに見る多入種・多民族」です。20世紀初め、白人中心主義的な歴史観に基づいた米国史を提示するパジェントに対し、黒人の視点から歴史を提示するパジェントが試みられるようになり、1930年代の「凱旋のジャマイカ」では、限界はあるものの、黒人と白人の別を越えてジャマイカの歴史を描くという試みがなされ、文化的脱植民地化の重要性を公共の場で訴える機会となったことが論証されています。ぜひ舞台が見てみたい!と思う、そんな論考でした。

皆様、ありがとうございました。

(HH)

## 執筆者紹介

恒木健太郎	経済学部講師
中村 友保	ネットワーク情報学部教授
Michael Dreiling	Associate Professor of the University of Oregon
Nicholas Lougee	Learning Specialist at Services for Student Athletes of the University of Oregon
松田智穂子	経済学部講師

専修大学人文科学研究所月報

第278号(2015.11.24)

〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1

専修大学人文科学研究所

発行者 鈴木 泰